

## 「地域における生活の継続性を考える建築計画」

### 震災関連セッション報告

於：神戸大学国際文化学部 D414 室

9 月 12 日 (金)

**被災者の地域生活の再建と計画 (15:12 ~16:16)** 司会：石井敏・山田義文

5007 大船渡市末崎町「ハネウエル居場所ハウス」の設計意図と使いこなしの比較 東日本大震災被災地域の環境移行を支えるコミュニティカフェに関する研究

○生越美咲 (北海道大)・森傑・野村理恵 (25)

5008 人が集まる場所と健康 災害時のリロケーションに関する研究

○古賀紀江 (関東学院大)・横山ゆりか・小松知寛・狩野徹 (29)

5009 2004 年インド洋津波における被災者の生活継続からみた再定住地の計画条件 関係性の継承・再編からみた住宅・地域計画に関する研究

○前田昌弘 (京都大)・高田光雄・石川直人・伊藤俊介 (33)

5010 内陸後方支援都市の被災者の居住支援に関する研究 東日本大震災における岩手県を事例として

○富安亮輔 (東京大)・大月敏雄・西出和彦 (37)

4 題のいずれも震災に関わるテーマのセッションである。3 題が東日本大震災、1 題がインド洋沖津波 (スリランカ) をテーマにしたものだった。

5007 は大船渡につくられた「居場所ハウス」(集会施設) をテーマとし、設計意図とその使いこなしの状況をヒアリング、行動観察、実測調査により示した。この「居場所」が利用者の活動を広げ、またその拠点となっている様態を丁寧な観察調査から明らかにしている。利用者に手を加えることができる余地が与えられており、それが利用者の愛着を深め、親しみある居場所になっている状況が示された。一方で、ある利用者にとっての居場所になればなるほど利用者の固定化も進むこととなり、多様な利用に応えられなくなるという悩ましい現状も紹介された。

5008 は仮設住宅団地の立地やそのつくり方が、特に高齢居住者の生活、健康や精神状態にいかに関与するのか、それともしないのかを明らかにしようとする研究である。「住まい手がインパクトの克服をしやすい環境」とはどのような条件や状況でつくられるのか、環境行動学的視点から考察することを試みている。福島県の仮設住宅団地を事例に、住民から得た「他者と関わるができる場所」の情報をもとに、生活状況と重ね合わせながら読み解こうとしている。1 事例による結果の報告だったが、今後、条件異なる様々な仮設団地での調査を重ね、比較考察していくことでの仮説の検証が期待される。

5009 はインド洋津波の被害を受けたスリランカの沿岸漁村の住民の移転後の再定住地の状況についての調査報告である。2008 年と 2013 年の同地区の調査から、再定住地の変化を居住者の生活・仕事の継続や居住環境の維持・管理の観点から丁寧に分析している。行政や NGO の積極的な介入が撤退したのち、ある意味コントロールのたがが外れたことで、新たな居住者を受け入れながら、新たな価値が見いだされて定住率が上昇した。地域全体の環境の荒廃は明らかだということだが、一方で、緑に覆われた自然豊かな環境の中で個々の居住者が豊かな生活を送っている様はとても興味深い結果である。東北でこれから進む高台移転等の再定住の将来をも重ねて考えさせられる内容だった。

5010 は岩手県を事例とした内陸後方支援都市の居住支援の実態、特に被災者が集うために設けられた場所の運営状況や利用状況について焦点があてられての報告だった。復興支援センター、カフェ、サポートセンターなど名称はそれぞれだが、いずれも内陸部への被災避難者のための集いの場である。運営状況や利用状況、自治体の関与の度合いなど様々な様態が紹介された。利用者の評価は高い一方で、現実的にはこれらの場所にアクセスできない人々が数多く存在し、情報伝達等における格差も生じてしまう現実もある。今後の災害に備えた都市間連携のあり方、被災者支援のあり方等にも示唆を与える内容だった。

それぞれまさに on-going の課題でもあり、利用者の入れ替わり、利用者自身の変化や社会の変化など時間の経過の中で絶えず変化しながら、新たな課題や状況が生み出される。被災地における調査研究は難しい。しかし、たとえ一断面でも、その時々を丁寧に記録していくこと、そして成果を蓄積していくことは建築計画研究にとって必要かつ非常に価値があることである。今回発表の 4 題についても、細くても長くそれぞれのテーマに関わり続けながら、データを収集し成果を蓄積されることを大いに期待する。人と場の関係においては、当初の計画通りにはいかないこと、予測を超えた使われ方や状況が生じることもある。だからこそ難しくも研究に対する好奇心を掻き立てる。震災に関わる場や人に関わる知見はまだまだ少ない。過去の災害を教訓とし、さらに将来の災害に備えるためにも、今ある状況をしっかりと調査研究し続けることは引き続き必要なことだとあらためて考えさせられたセッションだった。(文責：石井敏)